佐保光俊　令和7年2月度特別作品

大山道（だいせんみち）

佐保 光俊

大山山頂の池に現れ、大山中腹の大山寺に祀られている地蔵菩薩は、現世の苦しみから万物を救うとともに「利生水（りしょうすい）」を恵み、飲むものに延命をもたらすという。

平安時代、農耕の主力であった牛馬にもその水を飲ませようと、西日本の各地から大勢の人が牛馬を連れて大山寺に集まり、それがやがて日本三大牛馬市の一つ大山牛馬市へと発展した。

大山寺から放射状に伸びる、参詣のための五つの古道の総称が「大山道（だいせんみち）」で、その一つ「横手道（よこてみち）」に繋がる岡山県からの道約百二十キロを、半年かけて歩いた。

道の起点は、私の家から歩いて数分の生石（おいし）橋。そこから足守川に沿って北上し、吉備高原を越え一旦、盆地に下りてから、大山道最大の難所である三坂（みさか）峠（標高七百メートル）へと向かう。峠を越えた道は、やがて次の鳥居峠に差し掛かり、そこで初めて大山が全容を現す。そこに立てられた神門（鳥居）から見る大山に息を呑む。ここから、いよいよ大山道はクライマックスを迎える。

道は、芒原の中を郷原（ごうばら）集落へと下る。かつて、盆や碗などを作った木地（きじ）師の村である。滋賀県にルーツを持つ木地師集団は、小椋あるいは筒井姓を名乗る。郷原漆器は、今も伝統工芸として守られている。岡山県側最後の集落、延助（のぶすけ）集落（とさらに下り、今は鳥取大学の研究林となっている樹林の中、川上地蔵の立つ旭川の源頭を横切って内海峠（うつみたわ）を越え、鳥取県に入る。そして、大山山麓の、これもかつて木地師の村であった下岐屋（さがりかや）集落、御机（みつくえ）集落を経て、鍵掛（かぎかけ）峠を越え、大山寺へと向かう。山中の景色から一変して、日本海に伸びる弓ヶ浜半島が見えてくると、大山寺はもうすぐだ。

最盛期には、年間一万頭を越える牛馬が取引されたという大山牛馬市は、時代の流れの中、昭和十二年にその役割を終えた。

鳥居峠

神門に大山を見よ紅葉濃し

郷原

いくつかの墓は小椋と時雨れけり

延助にて

次はもう伯耆の村か柿赤し

川上地蔵

湧水はいま冬の水古道来て

内海峠

初冬の伯耆へと突く杖の音

下岐屋

ここはもう大山の裾大根懸け

踏み落とす峠の石の音冴ゆる

御机

ここもまた木地師の村や山眠る

裸木に日のあたりたる文殊堂

一ノ沢二ノ沢へ散り冬紅葉

大山の初雪にふれ横手道

小春日の弓ヶ浜見え古道終ふ

《作品鑑賞》　　髙尾ひとみ

佐保先生の古道歩きの成果を、また一つ読ませていただいた。雄大な自然の中、古い集落を辿るたびに秋から冬へと季節が移ってゆく。私も大山道へとワープし、ともに歩いているような感覚になっていった。

利生水を飲ませるため昔の人が牛馬を大山まで連れてきた道だということが作品の基底に流れている。句の力強さとともに深い余韻を味わった。

神門に大山を見よ紅葉濃し

紅葉の中、「大山を見よ」の言葉に一気に鳥居峠に連れていかれる。

初冬の伯耆へと突く杖の音

山道を歩むのに、杖の助けを借りている。その杖を伯耆へ向かう確たる一歩として、力強く突くのだ。

踏み落とす峠の石の音冴ゆる

落ちてゆく石の音が冬の峠に響く。「踏み落とす」の言葉が作者の歩みの強さ、確かさを伝えてくれる。

大山の初雪にふれ横手道

雪が降るとなぜ嬉しいのだろうか。それが初雪ならば、しかも大山の雪ならば・・・。

小春日の弓ヶ浜見え古道終ふ

鍵掛峠を越え、弓ヶ浜が見える。古道歩きを一つ終えた達成感を温かな日差が包んでいる。

《作品鑑賞》　　亜矢

「大山道」は、まるで百年以上前に歩いている景なのではないかと思わせる程、大きな景の作品である。行く先々で出会ったあらゆる自然と人間の営みを尊ぶ作者の姿勢が、全十二句から素直に伝わってくる。難しい言い回しが一切なく、修飾語もないといっていいだろう。作者の人間性まで感じられる。

いくつかの墓は小椋と時雨れけり

郷原集落の木地師の墓。作者は丁寧にひとつずつ見ている。恐らく素朴な墓だろう。そこで時雨が降ってきた。いろんな歴史を経てきたであろう土地ではあるが、明るさを感じる時雨である。

踏み落とす峠の石の音冴ゆる

この峠には作者一人しかいないのか。はるか下に転がり落ちる石の音が寂しく、厳しい道のりであることがわかる。丁寧に詠まれ、まさに目に見えるようである。

ここもまた木地師の村や山眠る

御机集落での句。作者は、いくつも木地師の村を通ってきたが、ここでもしみじみとした思いがこみあげてきている。　かつては栄えた村だったろうに。